築科主任）となった。講師時代に大阪市公会堂の競技設計で一等当選となって頭角を顕わし、その後大建築の設計に携わり、正木直彦をはじめとして美術界に多くの友人を持っていた。彼はこの日本で最初の本格的ギャラリーを設計するにあたって美術館としての機能を熟慮し、陳列壁面の確保と採光、通気、美観、工費等の諸条件を充たす独自のプランを立てた。そのプランはのちに黒田記念館、本校陳列館の設計にも応用される。なお、東京府美術館の建築については前野嘉著「むかしむかし、なぜ上野にギャラリーが」（『美術館ニュース』第304～307号。昭和五十一年五月～八月）その他に詳しい解説がある。

美術館の開館式は大正十五年五月一日に挙行され、正木直彦校長は美術家総代として祝辞を述べた。また、開館祝賀の意味で同日から聖徳太子奉讃美術展覧会（公募展）が開催された。

### ⑯ 日本工芸美術会の創立

大正十五年五月十八日、聖徳太子奉讃展観覧のため京都から会員が上京したのを機として帝国美術院臨時会議が本校会議室で開催された。そこで、完成した東京府美術館に美術工芸の陳列場が整備され、聖徳太子奉讃展工芸部で力作が展観されたことから、帝展に懸案の第四部を新設する問題が話合われ、時代の要求として当然設けるべきとされたが、文部省側が予算が無く、美術工芸の会員決定に問題が生じる恐れがあったため、一時保留となり、帝展第四部実現はまた延期となった。その頃、津田信夫と赤塚自得が中心となって新たに日本工芸美術会が組織され、同年六月に創立総会が開かれた。

日本工芸美術会創立の経緯は筆名「獏」で高村豊周が記した「工芸展うらおもて」（『工芸時代』創刊号、大正十五年十二月、『高村豊周文集』V所収）に凡そ次のように記されている。四月頃、帝展が工芸室を倉庫代りに使用するという話が伝わったため、若手の工芸家が工芸室を最も正統な方法で使用しようということになり、豊周が渡辺素舟に相談した。ところが帝展の時期に工芸済々会が工芸室の借用を申込んであるとわかり、血の気の多い若手の作家をまた嫌がらせた。工芸済々会は懐古趣味、守旧主義の同人組織で工芸界に君臨する様子が見えるが、それよりはここに新しく全日本的総合的の工芸団体を作って新旧東西の別なく良い工芸品を一般募集して大展覧会を開くことにしたならばどうか、その主動者には誰がよいかと相談し、豊周が津田信夫にあたった。津田は若手の運動に非常に同情を持っていて、しかも津田自身は一方の色彩に偏るのを好まず、絶えず大局に眼をつけて大きい工芸界の流れを形作って行こうとする比較的公平な立場にある人であった。工芸済々会から再三入会を勧められても断り、若手の研究会にも関係せず、いつも双眼鏡を取って司令塔に立っているような感じで有象無象の動きを眺めていた。津田は、その少し前から赤塚自得と黙契があり、豊周の懇望と工芸界の形勢とに感じる所があったのか動き始め、全工芸界のためにここに新しい集団の必要なる所以を工芸済々会の中心人物である香取秀真、海野清等に話したところ、始めは工芸界の大局より、新しい力のある団体が生れては困ると反対され、有耶無耶になりそうだった。そこで工芸済々会と金工の研究会の両方に所属する北原千鹿、佐々木象堂、杉田禾堂、山本安曇が事務を進行させ、創立相談会の

第一回が開かれ、工芸済々会全員と津田信夫、藤井達吉、広川松五郎、渡辺素舟、高村豊周が集まり、さらに三、四回の会合を重ね、創立決定に至った。会名は投票の結果、広川松五郎の提案による日本工芸美術会に決まった。

同会は全国の工芸家が出品する展覧会の開催を主な目的とし、第一回展を帝展と同じ時期に東京府美術館で開催することとなった。七月、全国の工芸家に出品を呼び掛ける檄文が飛んだ。左に掲げる「檄」を書いた高村豊周は、「この檄文で工芸家という工芸家は皆緊張した。いよいよ帝展参加の願望がかなうかどうかは、秋の展覧会の成績如何にかかわることがわかったからだ。絶対に失敗出来ない、いわば背水の陣だった」(『自画像』)という。

日本工芸美術会生る。

目的は主として展覧会にあり。展覧会は即ち会員並びに一般作家の作品の粋を蒐めて現代工芸美術の鳥瞰図を作らんとするにあり。是に依つて本会は工芸美術の凡ての部門を綜合し、汎く各系統の作品を網羅せんとす。素より趣味の古癖に偏せず、従つて異種を捨てず。古典の精を穿つと同時に新様の鮮を採る。苟も鑑賞に値するものは新古を合せ正奇を容れて余す所なからんとす。この点に於て、従来の工芸美術展覧会とは悉く選を異にしたる、我邦未曾有の大綜合展覧会の出現を見るに至るべし。

斯くの如くにして本会成る。作家諸君は本会に於て始めて自由に自己の真率なる主張を「現代」に示すことを得べく、また「現代」は本会に依りて始めて工芸美術鑑賞の標準を定むることを得ん。

されど、斯くあらしめんがためには即ち作家諸君の努力に依るものなくんばあらず。本会は既に準備を整へたり。活殺は正に諸君自身の手にありと言はざるべからず。

世人は今や異常なる期待を以て諸君の努力の結果を視んとす。従つて作家諸君の努力にして今日もし全きを得ば即ち明日に於て工芸美術を絵画彫刻と鼎立せしめ得るに至るべく、これに反して此の好機を逸せばやがて禍根を将来に胎すに至らんこと、また言を俟たずして明かならん。

玆に普く作家諸君に訴ふ。

本会は最も謙虚なる態度と公平なる制度とに依りて諸君の力作を収攬し、以て権威ある工芸美術の真価を「現代」に問はんとす。幸ひに本会の主旨を体して力作を寄せられんことを熱望するものなり。斯くして諸君の努力と本会の業蹟とは主客相俟ちて過ちなきを得ば、やがて大正工芸史の最も重要なる一頁の資料として永遠に昭昭たるものあらん。

(『高村豊周文集』Ⅰ)

同年十月十六日から十一月十五日まで東京府美術館において、帝展と時を同じくして第一回日本工芸美術展覧会が開催され、搬入数三百二十一点、入選七十点、入選者は六十四名、本校卒業生は十三名が入選し、鑑査主任の津田信夫は同年十月十二日『時事新報』紙上で「一般に若い人々の努力が見え、中にも内藤春治君の『机上装置』は敏感な面白い作品である。傾向は新舊兩極端に及びこゝにも

時代の反映が窺はれる」と語った。

帝展、日本工芸美術展開催に先立って、十月六日、本校講堂で帝国美術院会議が開かれ、予算も一万三千円が計上され、翌年からの帝展第四部設置を会員は満場一致で可決した。日本工芸美術会の創立と展覧会の開催が帝展第四部実現に大きく寄与し、目する方向が違うかに見えた本校関係者の工芸家の一致団結からその力が生れたと言えよう。

### ⑰ 東方絵画協会

大正十五年六月、日中両国画家（伝統的中国画と日本画の分野）の提携による東方絵画協会が成立し、日本側の事務所が本校文庫内に置かれた。左記は昭和三年当時の同会組織である。

東方絵画協会（東京）上野公園東京美術学校文庫内
（北京）宣武門内温家街一号

日本部（会　長）子爵清浦奎吾
（幹　事）正木直彦、川合玉堂、横山大観、小室翠雲、結城素明、荒木十畝、小堀鞆音、竹内栖鳳、都路華香、菊池契月、山本春挙、渡辺晨畝、下村観山

中国部（会　長）徐世昌
（副会長）汪大燮、熊希齢
（幹　事）江庸、周肇祥、顔世清、陳漢第、陳年、凌文淵、金紹基、王一亭

（『文学博士中村久四郎氏調査・現代日本に於ける支那学研究の実情』昭和三年十二月。外務省文化事業部）

大正七年、日本画家渡辺晨畝と金紹城ら北京の画家たちとの交流に端を発する日中画家交流運動は、同十年の第一回日華聯合絵画展覧会（北京）、同十一年の第二回展（東京）、同十三年の第三回展（北京）、同十五年の第四回展（東京、大阪）と、日中両国交互の展覧会開催によってかつて無い程興隆した。第三回展あたりから外務省対支文化事業部が支援することになり、したがって、展覧会は半官半民的性格のものとなり、日本側は帝展日本画部の重鎮が参画し、正木直彦がそのとり纏め役となったが、当時度々中国旅行を試みて中国の画家や学者と親交のあった本校教授大村西崖（吉田千鶴子著「大村西崖と中国」『東京芸術大学美術部紀要』第二十九号。平成六年三月、参照）もそれに協力し、また、本校文庫主任北浦大介は正木を補佐して実務を担当した。かくて両国画家の組織を確立することになり、東方絵画協会が成立したのであった。中国側の中心人物は前出の金紹城であったが、彼はこの年、東京での第四回日華聯合絵画展を了えて帰る途中上海で病死した。そのため、同年十月十七日には本校で追悼会と遺作の展示が行われた。金紹城没後、北京では金の息子開藩とやはり北京画壇の大御所である周肇祥との間で対立が生じ、東方絵画協会は北京で開催を予定していた聯合展が開催できなくなった。それ以後、同会は変則的な展覧会を開いたが、種々の障害が生じ、昭和五年以降は同会は日本側の団体としてのみ存続することとなった。